



末岡 武彦 紹介

1. 理念

世界には様々な社会・人々があり、音楽経験も様々で、音楽に対する感じ方も異なる。こうした状況で人々に久しく創作した音楽を聴いてもらうためには、創作者は自らの内面に深く根ざした音楽を創造しなければならない。

2. 創作方針

世界で最も美しい、感動を呼ぶ音楽作品の創造と提供を行いたい。親しみやすい旋律・美しい和声・気持ち良いリズムをベースに調和の取れた世界を実現したい。完熟するまで無制限に創造と確認を繰り返し、音楽として熟成した事を納得した上で完成した作品を記録する。人々に終生の友人・恋人・家族となる作品を提供したい。

優れたピアノ音楽を提供したい。19世紀、ショパンは「ピアノの詩人」と言われた。20世紀、ドビュッシーは「ピアノの画家」と呼ばれた。末岡武彦は21世紀の「ピアノの物語作家」をめざしたい。

ピアノ以外の楽器でも、その特性を生かした独奏曲を創作する。管弦楽技法を早急に習得し、優れたアンサンブルや管弦楽作品を提供する。山内盛彬氏の旋法論を生かした歌や器楽曲を創作する。

3. プロフィール

第二次世界大戦後の日本の復興・高度成長期である、昭和31年（1956年）10月5日、東京都日野市に、二人兄弟の二男として生まれた。父は大手製造業の労務管理・総務など、仕事一筋、夜は関係者との接待に明け暮れた。母は短歌・手芸・株式投資など、多方面に趣味があった。

母は、私に4歳の時からヤマハ音楽教室でオルガンを習わせた。私は音楽に興味を示し、6歳から自らピアノを習った。7歳から作曲を始める。12歳で6年一貫教育の中学高等学校に入ると、吹奏楽団でクラリネットを習い、又、クラシック音楽の同好会でバイオリンとのアンサンブルを楽しんだ。吹奏楽団は学生を中心に自主的に運営されており、指揮者としての経験や総譜を読む経験を積む事が出来た。父と兄は欧州のクラシック音楽のレコードを聴かせたり、指揮棒を買い与えたりして私の音楽活動を

支援した。

当時の日本の音楽は、欧米のポピュラー音楽（ジャズ・ロック）の影響を強く受けており、反抗文化の一環としてのフォークが流行していた。当時の日本の社会は左翼学生運動の退行期で、その影響は色濃く残っていた。本人はその反骨精神に共鳴するも、政治信条的には馴染めず、クラシック音楽も含む西洋音楽中心の状況にも違和感を感じ、日本の伝統音楽に興味を抱いていた。

この経験と状況が、私の自発的な作曲活動を促進し、本格的なピアノ独奏曲やファンファーレを創作するようになり、昭和 48 年（1973 年）16 歳の時には「吹奏楽のためのピアノ協奏曲」を創作し、実際に多くの友人の協力により初演を行った。但し、スケッチに半年、創作に 3 カ月、パート譜作成と練習に 3 カ月と、学業を殆ど無視したため、大学受験に失敗し浪人をする事になる。又、これより先の人生も与えられたレールを進まず、試行錯誤の人生となった。

受験勉強の後に、私立大学政治経済学部に入學したもの、一部の教授たちとの交わりを除き、細分化した大学の学問には興味が無かった。当時の日本は、日本列島全体に広がった公害問題の解決の途上にあり、1968 年ローマクラブが提示した地球環境・人口・資源の問題、南北経済格差の問題の解決に興味を示し、自らシンクタンクを樹立すべく活動したが、叶わなかった。学生を中心とする外国籍市民との交流はこの時代から始めた。以降一貫して外国籍市民の日本語ボランティア・定住支援を今日に至るまで行っている。

音楽では、ピアノの稽古を続けていたが、演奏能力が高度な大学の交響楽団にはとても自分の自由になる場所は見つけられず入団しなかった。ポピュラー音楽を指向した作品を幾つか手がけたが、発表する場が見つけられなかった。以降今日に至るまでピアノ独奏作品を中心とした作品創造に専念する事になる。父は、孤独を指向する本人の状況を憂え、3 か月ほど、自分の会社の工場で、組立工としてアルバイトさせた事もあった。

24 歳、昭和 56 年（1981 年）に就職する。職業人としては、大手企業向け ICT・経営戦略支援サービスを中心に仕事を展開させた。システム開発企業で意思決定支援システムの開発に 15 年従事した後、ICT コンサルタントとして 6 年ほど、地理情報システムの普及活動、サプライチェーンや会計システムの要件設計を行い、プロジェクトマネジメントなど、ICT 教育も行った。その後 10 年ほど、戦略系経営コンサルティング会社に勤務し、経営戦略・ICT 戦略・技術戦略（MOT）の策定と実践化に従事したが、結局はレールの上に乗れず、自ら起業せざるを得なくなった。

昭和 59 年（1984 年）28 歳の時、詩人でもあった友人の紹介で沖縄の民族音楽研究家で音楽理論家の山内盛彬氏に出会い、旋法論を学ぶ。氏の遺作の編曲も含め、数曲ほど、歌を創作した。又、ジャーナリストの友人の紹介でチェリストとも知り合い、平成 9 年（1997 年）チェロの作品も創作した。更に、日本に仕事や勉強で来ていた東欧の女性達が長期に自宅に滞在した事もあり、音楽活動にも刺激を与えた。

ジャーナリストの友人は私の音楽の最大の理解者であり、ボランティアのプロデューサーとして、折に触れて私の自宅などを利用したミニコンサートを開催している。

ICT 業界に勤務していた事もあり、テクノロジーの進歩には注目しているが、一般向けシンセサイザーやデジタルピアノとの出会いは即興や稽古の支援に役立つばかりでなく、ピアノ以外の楽器のための音楽創作にも役に立っている。特に、音楽技術の集大成とも言える Finale2012 により、楽譜作成が効率的になったばかりでなく、殆どすべてのジャンルの音楽を自然な音に近い形で演奏をシミュレート出来

る様になった。現代では、創作者が演奏家に依存しなくても自らの作品を、インターネットを通じて世界中に開示出来る。自分もこの機会を生かし、音楽産業の発展と演奏家への作品提供、人々への幸福感提供へいささかなりとも貢献しようと思う。

4. 音楽専門教育・研究

ピアノ演奏を長期にわたり某私立音楽大学ピアノ科卒業の先生に師事させていただいた。先生には、クラシックのみならず、自作曲についても演奏技法面で様々な指導を頂いた。作曲は必要に応じて自習しているが、十代の時、ピアノ協奏曲を含め、自らの作品を同じく某私立音楽大学作曲科教授（現名誉教授）に校閲していただいた。当時の私は溢れるばかりのテーマを散りばめ過ぎていたが、教授は一つのテーマを大切に展開させる事の重要性を強調、以降の創作の指針となっている。最近 Finale2012 により、楽譜を編集・印刷し、演奏をシミュレート出来るようになったおかげで、作品を楽譜と CD、YouTube で提供出来るようになり、作品を届け、助言をいただいている。

音大作曲科に進学した先輩からも、テーマの展開・転調の重要性、何よりも楽譜を丁寧に作成する大切さを学んだ。十代の頃から、創造した作品は総て記憶し、完熟した段階で譜面を作成していたが、楽譜を丁寧に作成する習慣はこのプロセスを一層明確にしている。これは Finale2012 などを利用した電子的な創作活動を行うようになって一貫して順守しようと考えている。

昭和時代末期に沖縄国際大学名誉教授山内盛彬氏から「五度旋法論」を学んだ。「五度旋法論」は西洋・東洋の音階理論を発展・統合化させる可能性があり、作曲家にとっても創作活動のための優れたツールになる可能性があるため、適宜紹介をして行きたい。

5. 受賞など

昭和 56 年（1981 年）2 月 24 歳の時に株式会社リトー・ミュージック主催の「1980 年キーボーディストコンテスト」で自らの作品と演奏に対して「ピアニスト賞」を受賞した。リトー・ミュージックはシンセサイザーなどのキーボードを中心とした雑誌類を発行しており、その情報発信の中心であった。ここではキース・エマーソンの影響を受けた技巧的な作品が評価された。

昭和 60 年（1985 年）29 歳の時に山内盛彬氏の遺作である「明け富士節」を編曲している。昭和 61 年（1986 年）山内盛彬氏の他界に当たり、この作品が海勢頭 豊氏により子供たちによる合唱で演奏された。

平成 9 年（1997 年）に弦楽作品として初めて作曲され、コンピュータに演奏させた無伴奏のチェロ・ソロ作品が、平成 26 年（2014 年）東京国際芸術協会主催の全日本作曲家コンクールに入選したが、実演奏家による深みのある演奏を実現する事が課題として残った。そこで披露演奏会に向けて実演奏家と表現力向上に向け協業し、パフォーマンスの極大化に努めた。演奏会では聴衆に感動を与え、審査員から「あなたが作曲家として最も期待出来る。感動が持続する曲創りに励むように。」と個人的感想であるものの、激励を受けた。

平成 26 年（2014 年）11 月 30 日に、不完全ながら、詩第一番「みなも」の実演を iPad で録画し、YouTube にアップロードした所、世界中のプロフェッショナル（作曲家・ピアニスト・録音技師・ICT 企業）から賞賛を浴びた。アップル社が関係するアップルコレクションでベストアップルビデオに選ばれた。

6. 影響を受けた作曲家

そもそも日本は、地理的にアジアの各地域の文化が集積する位置にあり、雅楽・声明・能楽・祭囃子・箏曲や三味線音楽などの莫大な伝統的音楽資産とシステムが存在する。このベースの上に西洋音楽を中心とした海外の音楽を受け入れて来た。第二次世界大戦後ヤマハやカワイはピアノやオルガンを教育システムも含めて普及に成功し、既に国内の音楽産業は成熟期を過ぎている。しかし、助言を受けている某私立音楽大学名誉教授は、コンサート会場以外での音楽環境や音楽を楽しみ、演奏する習慣についてはまだまだ改善の余地があると主張している。我々はコンサートやカラオケ以外で、自ら音楽を楽しむ場を持つべきであろう。

自ら影響を受けたと自覚している作曲家は次の通り。

J.S.バッハ、モーツァルト、ベートーベン、ショパン、セザール・フランク、サティ、ラベル、ドビュッシー、バルトーク、山内盛彬、マイルス・デビス（但し間接的に）、キース・エマーソン、キース・ジャレット、喜多郎、坂本龍一、山田浩貴

以上



Introducing Takehiko Sueoka

1. Philosophy

There are many societies and plenty of people in the world and each individual has his or her original musical experience and sense for it. Under this situation, Composer needs to create music based on his inner world deeply to make people listen to his original eternally.

2. Creation Objectives

Create and provide the most beautiful and stunning musical works in the world. Realize ecological world based on friendly melody, beautiful harmony and lively rhythm. Write down a complete work after brush it up unlimitedly and finally admit that it has matured enough. Provide works who become a lifetime friend, lover or partner of audience.

Provide excellent piano music. Chopin was named “Poet of Piano” in 19th century. Debussy was called “Artist of Piano” in 20th century. Takehiko Sueoka must become “Storywriter of Piano” in this century.

Create solo music for instruments except piano fully applying their characteristics. Provide good works for both ensemble and orchestra. Create songs or instrumental music applying “Mode Method” of Seihin Yamonouchi.

3. Profile

I was born on 5th Oct. 1956 (Showa's 31st) in Hino-city of Tokyo Metropolis as the second son of my parents when Japan had been recovered and developed rapidly after the destruction of WWII. Father was working for a large manufacturer as a management of laborers and general affairs, often came back late night for entertainment for related people. Mother had many hobbies from creating Japanese short poems; Tanka, French embroidery to equity investment.

Mother let me enter to Yamaha music school to make me to learn to play simple electric organ from 4 years old. I was interested in music and I started to study playing piano from 6 years old. I started

also composing from 7 years old. After I entered a junior and senior high school, I joined the brass band club and learned to play the clarinet and I also enjoyed ensemble with violins as a pianist. The brass band club was voluntarily managed by students and also I could have experiences as a conductor to read full musical scores and conduct band members. Father and Brother helped my musical activities by buying Western classical music records and a baton for conducting for me.

Japan was influenced by Western popular music like jazz and rock deeply and also original folk music was prevailing as dissident culture in 1970's. New left student movement was declining but influenced strongly to students' ideas and activities. The rebellious spirits of these movements had impressed me, however, I disliked their political ideas. Also I had a sense of incongruity against Japanese music scene influenced by Western music including classical, so I was interested in Japanese traditional music.

These experiences and conditions promoted my creation activities. I started to compose full scale piano solo music and fanfare for brass band. I created "Piano Concerto for Brass Band" when I was 16 years old in 1973 (Showa's 48th) and performed first in the high school helped by many friends. However, I spent 6 months for sketching, 3 months for writing down and 3 months for generating parts and exercise, ignoring studying. As a result I failed to pass the entrance examination for university. From this age, I could not go to the stable way of life and chose severe way with try and error in my life.

After 1 year hard work in the preparatory school, I entered the private university and majored in political science and economics. Although I had a good relation with some professors, I was not interested in any subdivided academic discipline. These days Japan had been resolving environmental pollution issues spreading over Japan islands step by step, and I was interested in resolving issues on global environmental destruction, explosion of population and depletion of natural resources which Club of Rome suggested in 1968. I tried to establish my original think-tank to resolve these issues, but could not. I started volunteer activities to help foreign students who were studied in Japan. I continue to help foreign citizens for Japanese study and stable settlement in Japan from these days to nowadays.

With regard to my music life as an university student, I was studying to play the piano. But I could not enter the orchestra of the university where they have highly skillful players, as I could not find out any free space to realize my idea there. I tried to create some popular music works, but could not find out any place to perform. After that I have just targeted in to create mainly solo piano music until now. Father was worrying about me as I was seemed socially isolated and made me to work in his factory as a temporary assembler for 3 months.

I got my profession when I was 24 years old in 1981 (Showa's 56th). I have developed my profession in the field of ICT and strategic management for large companies. After engaged in system development of decision support system in the SIer for 15 years, I did enlightenment activity on GIS, requirement definition of SCM and accounting and also did ICT education mainly on project management for 6 years as an ICT consultant. After that, I had worked for a strategic management

consulting firm for 10 years to engage in definition and practicing of management strategy, ICT strategy and MOT. But finally as I could not walk this relative stable way any more, quit the firm and started business by myself.

One of my friend who was once a poet introduced Mr. Seihin Yamanouchi from Okinawa prefecture, who were studying global traditional music and music theory when I was 28 years old in 1984 (Showa's 59th) and I studied his "Mode Method". I created some songs including arrangement of the last work of Mr. Seihin Yamanouchi. Another friend of me who is a journalist introduced me a cellist and I also created music for cello in 1997(Heisei's 9th). Central European women working and studying in Japan came and stayed in my house for some years and this also stimulated my music creative activity.

My journalist friend is understanding my music most deeply and sometimes hold a small concert in my house or other place as a volunteer producer.

As I was working in ICT industry, I am also watching progress of musical technology. I adopted a popular type synthesizer and digital piano. These instruments are not only useful for improvisation and study of playing but also beneficial to create music for other instrumentals except piano. Finale2012 maybe summarization of musical technologies ever developed. We can not only edit music paper effectively but also can simulate real play with nearly equal to natural sound for almost all kind of music. Nowadays, creators can show their original sound not always being dependent on players to the world through internet. I want to contribute to develop music industry, provide works to players and make people happy through music by making a good use of this current condition.

4. Education and Study of Music

I had studied playing the piano from a generous piano teacher who graduated from a private music collage for around one generation. She guided me not only classical music but also my original from a view point of technique and expression. I study composing by myself when I think I need. However, I asked a professor of composing of the same music collage (honorary professor currently.) to supervise my works including the piano concerto when I was teen. I was setting many themes I imaged in one music in those days. The professor taught me the significance of applying one theme effectively in one music and this became my lifetime music creation policy. I can provide my music through music paper, CD and YouTube easily these days as Finale2012 enables to edit and print music and simulate the playing. Therefore, I can afford to present my works concretely to the professor and get effective advices from him now.

My senior friend of the high school who entered a music collage also advised me importance of applying and modulating theme and also writing music paper politely. I have used to memorize all the current work and write down when it become matured since I was teen. And the custom to write down music paper politely made this process more definite. I will keep this way of creation style even when I create music electronically using Finale2012.

I studied “Fifths Mode Method” from Honorary Professor Seihin Yamanouchi of Okinawa International University in the end of Showa Age. “Fifths Mode Method” have a possibility to develop and integrate Western and Eastern scale theory and also have a possibility to become an excellent tool for creation for composers. Therefore, I want to introduce this theory appropriately.

5. Awards and Other Activities

I won “Pianist Prize” on “Keyboardist Contest 1980” held by Rittor Music Inc to my work and performance when I was 24 years old in 1981 (Showa's 56th). Rittor Music Inc. has published magazines on synthesizers and other keyboard instruments for a long time and has led the current music scene. They appreciated my work with high technique and atmosphere like Keith Emerson’s play.

I arranged the last work of Mr. Seihin Yamanouchi, “Dawn with Mt. Fuji” when I was 29 years old in 1985 (Showa's 60th). At his death, this arrangement was performed with children’ s chorus conducted by Okinawan singer song writer, Mr. Yutaka Umisedo.

A solo cello music work played by a computer, which was created as my first stringed instrumental music in 1997(Heisei’s 9th) was selected for All Japan Composers’ Contest held by Tokyo International Artists Association in 2014(Heisei’s 26). However, there remained one issue to realize a deep performance by a real excellent cellist. Therefore, I co-worked with a cellist to maximize the performance as a preparation for the prize-winners’ concert very hard. As a result, the cellist succeeded to make a good impression to audience at the concert, and the judge of the contest encouraged me privately telling “You are the most expected composer and keep to create music people can enjoy permanently”.

When I uploaded a still incomplete real performance video of Shi No1 “Minamo” recorded by iPad on 30th Nov. 2014(Heisei’s 26th), this video was appreciated by professionals (composers, pianists, a record engineer and an ICT firm) world widely. It was selected one of Best Apple Videos at the Apple Collection.

6. Composers Influenced from

Japan has a good geographical position to gather other Asian cultures and develop their culture applying these. Japan has huge musical tradition like Gagaku, Syomyo, Nogaku, Matsuri-bayashi and music for Sou and Syami-sen. Japanese accepted Western music based on this tradition. Yamaha and Kawai succeeded to develop music industry in the domestic area unifying sales of piano and electric organ with music education system after the WWII. Domestic music market had been already matured and declining. But the Honorary professor of the music collage who advises on my works insists on that we had better make music environment to enjoy and perform by ourselves except concert hall. I hope we have more space and chance to enjoy music actively except concert hall and Karaoke room.

Composers I Feel I have been influenced from
J. S. Bach, Mozart, Beethoven, F. Chopin, Cesar Franck, Erik Satie, Maurice Ravel,
Claude Debussy, Bartok, Seihin Yamaunouchi, Miles Davis (indirectly), Keith Emerson,
Keith Jarrett, Kitaro, Ryuichi Sakamoto, Hiroki Yamada

The Bottom of Line